



遺伝子病理・検査診断研究会

第1回 定期報告会の概要 (2017年7月8日開催)

2017年9月

2017年7月に遺伝子病理・検査診断研究会の第1回 定期報告会を開催いたしました。当日の会の概要についてご紹介させていただきます。

■遺伝子病理・検査診断研究会 発足のご挨拶

近年、様々な治療や病理診断において遺伝子に関連する検査や解析が重要視され、項目も多岐にわたっています。そのため知識を得るだけでなく、院内検査や外部委託している施設など様々な環境の施設が集まり、遺伝子検査における重要な要素や最新の知見を共有することの重要性が増してきています。このような状況を鑑み、本研究会の立ち上げに至りました。



代表世話人 長村義之
国際医療福祉大学大学院
日本鋼管病院 病理診断科

本研究会の第一の目的は、進歩し続ける遺伝子検査に関する新しい知識を身につけていくことです。今後、新薬の開発により解析すべき遺伝子の種類や手法も増えていくと考えられ、これらの情報に対してアンテナを高く持ち、最新の知識の吸収と共有をしていきたいと考えています。今後、本研究会がますます発展し、遺伝子解析・診断において、実際に診断をする側や技術を施行する側、それぞれが協力して、わが国をリードしていくような研究会にしていきたいと心から願っております。

■ディスカッション

研究会会員に実施した「遺伝子検査の現状に関するアンケート調査」の集計結果を元に以下のテーマについて議論を実施しました。

<テーマ1>固定条件について

ホルマリンの種類（緩衝 vs 非緩衝）について、実際に使用している施設間での情報交換がなされた。非緩衝から緩衝へ変更できない理由として、病理検査への影響（染色性への変化等）を挙げられる施設もあった。

<テーマ2>遺伝子検査に用いる検体種について

細胞診材料を遺伝子検査に用いるべきかどうか討論がなされた。国際的に細胞診での分子診断は一般的になりつつあり、今後細胞診が遺伝子検査に使用できるよう本会でもデータを蓄積すべきとの議論がなされた。

<テーマ3>検体のトリミングについて

遺伝子検査を行う上で、検体のトリミングの重要性について意見交換がなされた。さらに今後生検材料のような限られた試料をいかに多様化する遺伝子検査に応用していくか、という問題提起がなされた。

<テーマ4>Heterogeneity について

腫瘍の Heterogeneity（多様性）について事例を挙げて議論がなされた。組織型が異なる腫瘍は分けて検査すべきであるが、コストとの兼ね合いが必要との意見もあった。

<テーマ5>脱灰検体の遺伝子検査について

脱灰検体は PCR がかかりにくく、遺伝子検査への応用が困難であるとの意見が数多くあった。また骨を検体とする場合は、LBC を応用するなど新しい手法の紹介もなされた。

<テーマ6>液状検体の取扱いについて

Liquid biopsy を用いた遺伝子検査が今後ますます増えてくるが、検体の管理や検査の実施をどの部門が実施すべきか、という問題提起がなされた。今後検討していくべき重要な課題である。

<テーマ7>RNA を対象とした検査の課題

RNA を対象とした ROS1 遺伝子検査が臨床の現場へ登場したが、検体の固定条件や管理方法など院内実施には課題が多い。本研究会で継続的に検討していくべき課題として挙げられた。

以上

※詳細内容はホームページ上の会員専用ページに掲載しております。

お問い合わせ

遺伝子病理・検査診断研究会 事務局

E-mail : jimukyoku@idenshi-byouri.com

URL : <http://idenshi-byouri.com/>

IR170919-01